

「アルゼンチン文化」¹－異文化理解講座の一例

La cultura argentina

- Curso para la comprensión de culturas diversas -

B. P. アスティゲタ

ASTIGUETA Bernardo P.

最初に

異文化理解の第一歩は「他者を知ること」にあるが、講座という形式を通じてある特定の国や人々の文化を伝えるにあたり、どのような側面を切り取って伝えるのかは大きな課題である。

著者は、神奈川の一般社会人を対象にした語学や異文化理解の講座でアルゼンチンの文化について扱ってきた。受講者である多くの社会人は、アルゼンチン文化に関する一定の知識はあるが、それはアルゼンチンタンゴやメッシに代表されるアルゼンチンサッカーなど部分的なものにとどまっている傾向にある。また、神奈川県は日本在住のアルゼンチン人の約3分の1が居住する日本で一番アルゼンチン人が多い都道府県であるが²、実際にアルゼンチン人と接したことがある人は非常に限られており生の異文化体験をしている人も少ない傾向にある。

こうした状況の中でアルゼンチンという国や文化に関して、部分的でステレオタイプな知識にできるだけならないで、全体的な理解を手助けするような講座はできないだろうか。できるとすればどのような要素を取り上げて紹介したらよいのだろうか。日本でも知られている著名なアルゼンチン人や音楽・スポーツなどがどのような文化的土壌から生まれてきたのか。その理解に役立つような情報を提供できれば、限られた時間の講座ではあっても、一定の体系的な異文化理解を促進できる可能性があるのではないだろうか。本講座はこのような問題意識に基づいてデザインされた。

本講座で紹介する文化に関する要素

日本語の「文化」という言葉は実に様々な定義や捉え方があるので、いかなる文化を取り扱うにあたって、まず「文化」という言葉をどう捉えるかを明らかにしておく必要があると思われる。

本講義では、文化の概念を「一定の社会を構成する人々によって習得・共有・伝承される行動様式や生活様式の総体」と捉えたが、そこには人々と自然との関わり方、歴史や教育から得られる言語や習慣、宗教と道徳、様々な伝統や信念によって培われた世界観や価値観、人間関係のパターン、社会的な振る舞い、美的な感覚等の複合された総体など、実に様々な要素が入るため、一回の講義という形で取り扱うことは不可能である。従ってここでは、人々の生活様式等に関わる社会構成、現在の社会構成を作った国の歴史、そしてその歴史と密接に関わってきた自然環境の三つの要素に絞って紹介し、最後にこれらがいかにアルゼンチンの文化に影響を与えたか、アルゼンチンの文化の特徴を述べながら紹介する。また日本との比較の視点を取り入れることが理解の助けになると思われた点に関しては、とこどころ日本についても言及している。

1. アルゼンチンの地理

アルゼンチンを知り、その文化を考察するにあたり、先ず国の地理的位置、規模、そして気候や風土の多様性を理解しておく必要がある。

アルゼンチンは、アメリカ大陸の一番南、北緯 21 度から南緯 55 度に位置している。日本の地理的位置(南緯 20 度～北緯 45 度)と比較すると、同程度の緯度にあるため四季がある点が似ているが、アルゼンチンの方が極域により広がっているため(アルゼンチンを北半球の日本の位置に置いてみると、カムチャツカ半島の間あたりまで到達する)、アルゼンチンの南部の冬は日本の北部より厳しい。

アルゼンチンの長さは南北 3,694 km に及び、面積は世界第 8 位(日本は 62 位)、南米ではブラジルに次ぐ 2 番目に大ききで 2,791,810 km²である。これは日本の約 7.5 倍にあたる³。アルゼンチンは国土の 54%が牧草と草原の平原、23%が台地で 23%が山岳地帯になっている。日本は山地が 73%を占めるので地勢的に日本とアルゼンチンは大きく異なる。

アルゼンチンの国土は北部、東北部、中部、南部、北西部に分類されているが、これは日本の「地方(東北地方などの)」の分類と同様に行政の単位を示すものではなく、地理的な区分である。



(図1)アルゼンチンの地理的地位

(図2)アルゼンチンの5つ地方⁴

各区分にはそれぞれ以下のような地勢的な特徴がある。

- ① 北部: ボリビアやチリと隣接し、アンデス山脈が多くを占めるこの地方には高度が高い地域が多く、乾燥地帯には様々な色彩の高い山々や、高原、塩湖等がある。南東部には亜熱帯の密林等もあり、非常に変化にとんだ風景が見られる。
- ② 東北部: パラグアイ、ブラジル、ウルグアイに隣接する地域で、熱帯雨林や湿原が形成されてい

る。この東北部の地理的特徴が最も顕著に現れているのはイグアスから首都ブエノスアイレスの入口まで広がる大規模河川と原生林からなる「メソポタミア」と呼ばれる地域で、豊かな動植物の生息地になっている。その中に世界最大の滝の一つであるイグアスの滝(世界遺産)もある。

- ③ 中部:アルゼンチンの中部は温帯で四季がはっきりしており、日本と同様に夏は非常に暑く冬は大変寒い。地形は平らな湿原や草原地帯が大部分を占めており、中部とウルグアイとの間には、「リオ・デ・ラ・プラタ」(Río de la Plata)と呼ばれる、河口が約 220kmある巨大な川が流れている⁵。この川はアルゼンチンにとって国の玄関とも言えるもので、首都であるブエノスアイレス市の歴史や文化と密接に関わっている。中部の南側には、有名な「パンパ」と呼ばれる果てしなく広大な平原が広がる。パンパは国土の約 20%を占めており、アルゼンチン経済の柱である農牧業の中心地になっている。
- ④ 南部:この地方は一般に「パタゴニア」の名称で呼ばれている。パタゴニア地方の大部分は冷涼気候で、荒涼たる砂漠が広がる。南部の大西洋側の海岸部には特色ある動物相で知られているバルデス半島がある。この地域は、世界でも貴重な生物の宝庫で、アザラシ、ペンギン、ゾウアザラシ、クジラなどが自然に生息し、世界自然遺産に登録されている。また、南部のアンデス山脈側は、スイスの風景を髣髴させるような地域で、森林に覆われた透明な湖、万年雪を聳えるアンデス山脈、そして、世界的にも有名な氷河の地などが広がる⁶。
- ⑤ 北西部:一般に「クージョ(Cuyo)」と呼ばれているこの地域は海拔 3,000m以上の火山が連なるアンデス山脈が南北に広がっており、チリとアルゼンチンの国境になっている。アメリカ大陸で最も高い山、アコンカグア(6,962m)もここにある。この地域には溪谷などが多く、ブドウ栽培に適した気候条件になっているため、ブドウ畑がよく見られる。

このようにアルゼンチンは、果てしなく広がる平原から、高くそびえる山脈、乾燥地帯、さらに、湿原、熱帯雨林、そして南部の氷河がある地域まで、多様で豊かな自然、風土に恵まれている。

暑い気候から寒い気候まで様々な気候があり、日本と比べると山や平地、川など地形も大きくて広い傾向にある。こうした地理的な特徴や多様な風土がアルゼンチン文化の形成にどこまで影響しているかを特定することは困難であるが、アルゼンチンの文化の大切な要素である。例えば、アルゼンチンは多くの日本人がラテンアメリカの文化に対して漠然と抱いている「暖かい国」の陽気な、もしくはトロピカルなイメージは当てはまらない。

2. アルゼンチン共和国の歴史

次に重要な要素として歴史の概略があげられる。近代国家としてのアルゼンチン共和国の歴史は 1816 年にスペインから独立したときから始まるが、現在のアルゼンチンの領土の歴史はスペインに植民地化される以前、ラテンアメリカの先住民の時代に遡る。

① 先コロンブス時代

この地はラテンアメリカの先住民の代表的な文明、例えばマヤ文明やインカ文明の中心地からは地

理的に離れていたため、こうした文明の影響は他のラテンアメリカ諸国と比べると弱かったとされている。この地域は狩猟・遊牧生活をおくる先住民の集落などが点在していたとされているが、16 世紀にスペイン人が到着してから大きく変化していく⁷。

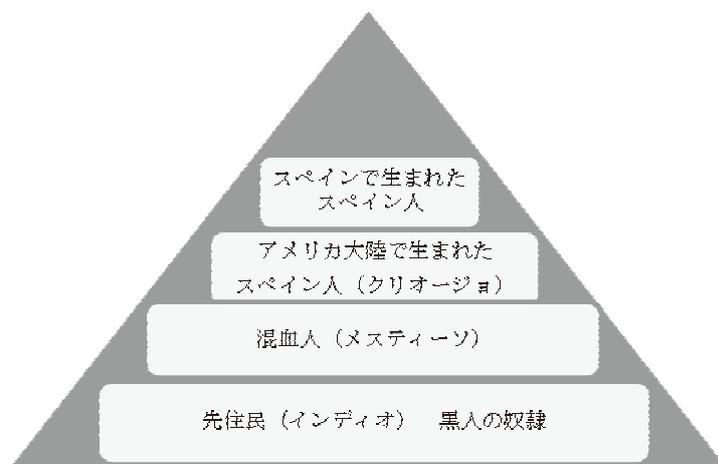
② 植民地の設置

スペインの探検家、フアン・ディアス・デ・ソリスが 1516 年にラ・プラタ川を発見し、この時からスペインがこの地域を植民地化していく。スペイン人はラ・プラタ川の上流に「銀の山」があると信じていたためこの地を攻略しようと 1536 年にペドロ・デ・メンドーサが率いる植民団を送り町を建設させた。これが現在のブエノスアイレスの前身である「ヌエストラ・セニョーラ・サンタ・マリア・デル・ブエン・アイレ市」である。この町は先住民の激しい攻撃に遭い一時放棄されたこともあったが、スペインの植民地政策が進展していくにつれ、町と周辺も徐々にその支配下に組み込まれていく。ラ・プラタ川一帯の地域は 1573 年ごろには完全にスペインの支配下に置かれたとされている。

現在のアルゼンチンの領土は新大陸におけるスペインの植民地全体から見ると周辺の地域で、16 世紀末になっても植民地統治のための中央組織もおかれていない状況であった。行政区分的にはペルー副王領に属していたが、中心地からは遠く離れていた。しかし 17 世紀に入るとポルトガルが領土を拡大するために自国の植民地であるブラジルからスペインの植民地に対して攻撃を行い、小競り合いがたえなくなったため、戦略的な意味からスペインにとって重要な地域になる。スペインは 1776 年にこの地を「副王領」(リオ・デ・ラ・プラタ副王領)としてペルー副王領から分離させ、ブエノスアイレスがその副王領の首府となり正式に港が開港された。

③ 独立戦争と内戦

植民地時代のアルゼンチンは、階層構造の不平等社会であった。一番高い位置をスペインで生まれたスペイン人が占めており、次にクリオージョと呼ばれるアメリカ大陸で生まれたスペイン人、次に先住民とスペイン人の混血、最下層を先住民、そして数は少なかったが黒人奴隷が占める社会構造になっていた(表 1)。この二番目に位置するクリオーリョが 18 世紀末から経済的・政治的な権力を徐々に獲得していく。



(表1)植民地社会の階層構造

当時、スペイン人は植民地と本国との貿易によって出る利益を独占していたため、本国スペインやスペイン人に対するクリオージョの不満は高まっていた。そして1810年5月25日、ブエノスアイレスのクリオージョはスペインからの解放と自由貿易を求めて革命を起こし、自治を宣言した。これは当時のスペインがナポレオンに対して起こした独立戦争によって本国に政治的空白が生まれた機会を利用したものだったが、これがアルゼンチンを始めとするラテンアメリカのスペイン領土の独立戦争のきっかけとなった。アルゼンチンの独立戦争は難航し、正式に独立が宣言できたのは6年後の1816年7月9日であったが、独立後も指導者の間で政治体制や経済政策など多くの問題についての意見が一致しなかったため、長い内戦の時代に突入することになった。

④ 国家統一と西歐化

アルゼンチンには植民地時代から対立する二つの文化があった。一つはブエノスアイレスを中心とするヨーロッパ的な文明生活の文化で、もう一つは地方のスペイン的な伝統的生活様式を継承する文化である。この二つの文化の対立は、新たな国家を形成する際に大きな対立の火種となった。前者はブエノスアイレスを中心に統一された中央集権の国家を主張し、後者は各州の自治権を主張する連邦制を主張した。内戦期に前者は統一派、後者は連邦派として対戦した。

ブエノスアイレスと地方諸州との対立によって起こった様々な内乱は1861年まで続いたが、最終的には統一派が勝利し、ブエノスアイレスを含めた諸州からなるアルゼンチン連合が成立した⁸。これ以降、1853年に発布されていた憲法に基づいて、アルゼンチン共和国が建国されていく。

内戦で勝利を収めた側の権力者にはヨーロッパの思想の影響を受けた自由主義者が多くいた。彼らの自由主義とは、新しい国家の発展と近代化のためにはあらゆる側面に及ぶスペインの束縛から自由になり、イギリスやフランスなどのヨーロッパの先進国に倣わなくてはならないという思想であった。そして、先進国と同じように教育や産業を発展させ、自由貿易に力を入れる必要があると強調した。しかし、産業を発展させるためには労働力が必要だったので、ヨーロッパからの移民を奨励する大規模な政策が実施されることになった。⁹

1868年に大統領に就任した自由主義者のサルミエントは自由主義的な経済政策や教育政策を次々に実施していく。アルゼンチンは、ヨーロッパに倣った経済や社会の近代化を進めていったが、反面、土着の文化は弾圧されることになった。¹⁰

⑤ 現在のアルゼンチンへの歩み

移民の奨励政策によって、19世紀末から20世紀初頭にかけてアルゼンチンに来るヨーロッパ諸国からの移民は急増した。アルゼンチン政府はフランスやイギリスなど当時のヨーロッパの先進国からの移民や、労働力として優れていると考えられていたドイツ人などを求めているが、実際に来た人の多くは当時深刻な不況に見舞われていたイタリアなどの貧しい労働者階級の人々であった。¹¹また、20世紀に入ると第一次世界大戦や恐慌などの影響で困難な状況に置かれた人々が、新しい国で人生の新しい可能性を見出そうとアルゼンチンに移民した。

19世紀末から20世紀初頭のアルゼンチンは政治や経済の面で安定しており、また、外国人を積極

的に受け入れようとしていたので多くの人々がやってきた。1881年から1914年までに定着した外国移民は約420万人に達した。最も多かったのはイタリア人(約200万)で、次にスペイン人(約140万)、フランス人(17万)、ロシア人(16万)であった。ほかにポーランド、ドイツ、レバノン等からの出身者もいた。1914年の国勢調査によると、国の人口の30%が外国人、ブエノスアイレス市に限ると60%が外国人であった。¹²

この現象は「移民の洪水」と呼ばれているが、アルゼンチンの社会構成を著しく変容させた。ヨーロッパから大量の移民が「洪水」のようにブエノスアイレスになだれ込むと、外国資本も流入し、それまでは小さなスペイン的な都市だったブエノスアイレスは、「南米のパリ」と呼ばれるほどのコスモポリタンな大都市に変わっていった¹³。また、労働力の流入とそれに続く経済発展の結果としてアルゼンチンは1880年から1930年までの間にアルゼンチンは世界の10の裕福な国の1つに数えられるほどになった¹⁴。

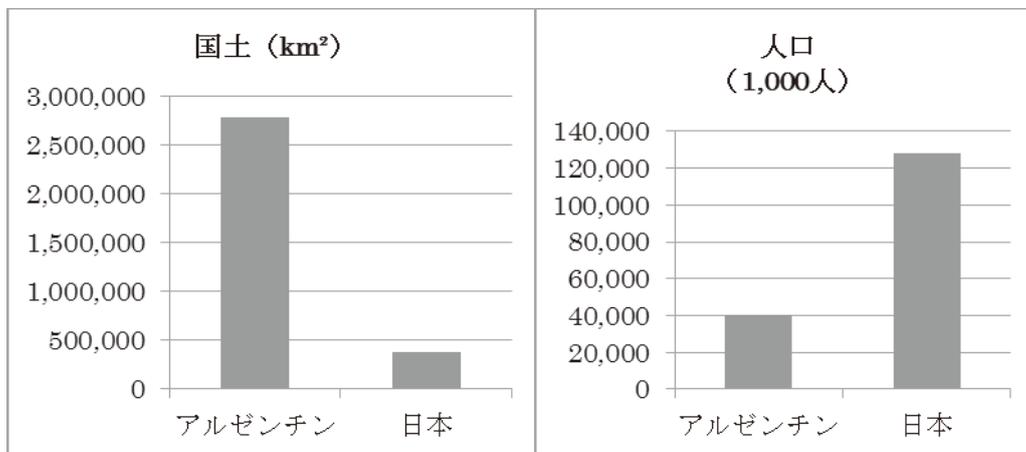
移民政策はこのように、アルゼンチンの社会・経済などあらゆる分野に大きな変化をもたらしたが、文化の分野にも大きな影響をもたらした。それまでスペインの文化が基盤だったアルゼンチンの文化は、スペインでないヨーロッパの要素が強くなり、特にイタリア文化の影響が言語、食生活、ファッションその他様々な分野に及び、現在のアルゼンチンの文化的な下地となった。

20世紀初頭には富裕国に数えられたアルゼンチンであったが、1929年の世界恐慌以降は政治的に不安定になり、その後民主主義政権が何度もクーデターによって倒される長い激動の時期に入った。島の領有権をめぐるイギリスとの紛争や政府の経済運営の失敗などにより、20世紀後半にも多くの経済的社会的混乱を経験したが、現在は比較的安定期した状態にある。

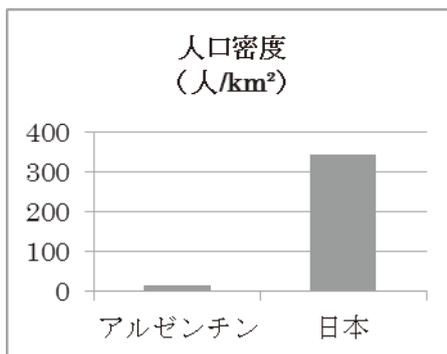
3. 現在のアルゼンチンの社会構成

文化の全体的な理解には、地理や歴史のほかにも、現代の基礎的な社会構成に関する情報も重要である。

2010年の国勢調査のデータによると、アルゼンチンの人口は4千11万7千人であった¹⁵。これは日本の人口の約3分の1である。アルゼンチンの国土は日本の約7.5倍あるので人口密度は日本よりずっと低く、14.4人/km²で、日本の約30分の一である¹⁶。



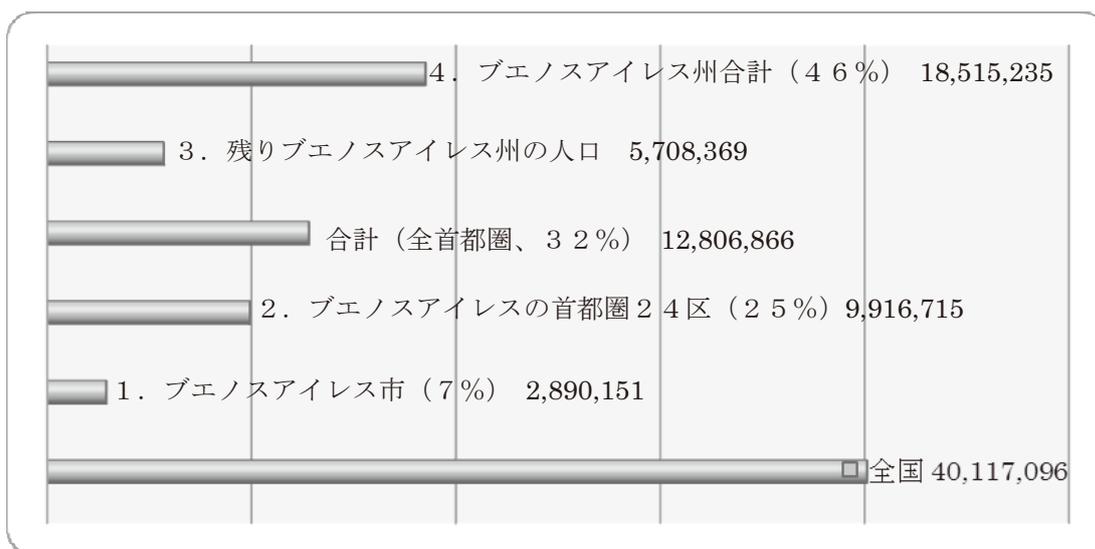
(表2)アルゼンチン・日本、国土と人口の比較



人種構成は「移民の洪水」によって、多くのヨーロッパ人が流入したので、アルゼンチンの国民はラテンアメリカの他の国と比較すると圧倒的に白人が多くなっている。アルゼンチン政府の統計局の 2010 年のデータによると人種構成は白人が 97%、白人と先住民との混血であるメスチーソが 3%になっている。しかし、アルゼンチンは以前と同様に移民を積極的に受けれている。2010 年現在の外国籍住民は 1,805,957 人になっている¹⁷。しかし最近では、韓国や中国を中心とするヨーロッパ諸国以外の移住者が増えてきたので、人種には新たな影響がみられる。

日本と比較すると特徴的な点として、国民の若さがあげられる。2010 年の国勢調査によると人口の平均年齢は 28.8 歳だった。同年、日本は 44.6 歳だったので日本と比較するとアルゼンチンは若い人が中心の国であるといえる。¹⁸

また、アルゼンチンは、日本と同様に首都圏に一極集中の国であるといえる。ブエノスアイレス市の人口は 2,890,151 人、ブエノスアイレス市以外のブエノスアイレス首都圏 24 区の人口は 9,916,715 人、この双方を合わせた人口は 12,806,866 人で、総人口の 32%にあたる。更に残りブエノスアイレス州の人口 5,708,369 人と合わせると 18,515,235 人になり、アルゼンチン総人口の 46%となる。



(表3)アルゼンチン全国人口に対する首都圏等の割合

アルゼンチンは地理的には広大であるが、ブエノスアイレス市や首都圏を除いて人口密度は低いので過疎地的な印象を与える。

4. アルゼンチンの文化

以上、アルゼンチンの地理、歴史、社会構成について概略を説明してきたが、こうした要素がどのようにアルゼンチンの文化を構成し、影響を与えていたのか。幾つか代表的な特徴の例を挙げて紹介したい。

アルゼンチンの風土は、アルゼンチン文化に大きな影響を与えている。アルゼンチンの音楽や文学、絵画には大自然に前にした人間の孤独や懐かしさを描いたものが少なくない。例えば、ヨーロッパで現在最も成功している若手画家の一人とされるヘルムート・ディッチュ(Helmut Ditsch、ブエノスアイレス州1962年生まれ)の作品は、人間の小ささと孤独を感じさせるアルゼンチンの広大な自然を表現している。

音楽では例えば、フォルクローレの歌詞に広大な自然における人間の無力さや人生の儚さが語られ、寂しさや孤独感がリズムでも表現されている曲が多い。これは隣国ブラジルのサンバなどと比較するとその違いが浮き彫りになる。

海に囲まれた島国である日本と異なり、アルゼンチンは五つの国(チリ、ボリビア、パラグアイ、ブラジル、ウルグアイ)と地続きなので、車や徒歩で国境を越えることができる。隣国とは歴史上、様々な国境紛争などがあったが、一般にアルゼンチン人は国境を越えることや外国人に対する抵抗は少なく、日常レベルで共生が成立していたといえる。

アルゼンチンでは北部の限れた地域を除いて、ラテンアメリカの先住民の人口は多くなかった。そして先住民はスペイン人征服者に追放されたり次第にスペイン人の町に吸収されていったため、この地域における先住民の与えた文化的影響は他のラテンアメリカの国々と比較するとごく限られたものにとどまったといえる。スペイン人がこの地を植民地化していく過程でスペインの言語、宗教、習慣といったスペインの文化が浸透していき、この地で生まれたスペイン人の子孫もその文化を継承したため、スペインの文化が現在のアルゼンチンの社会・文化の最初の基盤になった。

次に大きな文化的影響を与えたのは、ヨーロッパからの大量の移民である。イタリアを中心とするヨーロッパの様々な文化は現在のアルゼンチンに様々な影響を残しているが、中でも日常レベルで顕著に見られるのは料理の例である。アルゼンチン料理にはヨーロッパの多国籍料理的な特徴がみられる。例えば、スペイン料理にあるパンや肉、ハムや様々なソーセージ類、豆、一般的な野菜などを使った料理が基盤としてあり、そこにイタリア人移民が持ち込んだ様々なパスタ類やピザが広く浸透した。更に、様々な地域の移民により南欧のワインの文化、フランスのパン類、ドイツのソーセージ類やビール文化、レバノンやシリアの羊料理なども持ち込まれた。さらに先住民の食生活の影響を受けた鍋料理や牛の丸焼きなど、様々な要素が混ざり合い、徐々にアルゼンチン風になっていったのがアルゼンチン料理といえる。

移民の国であるアルゼンチンの社会は、異文化が混在する多文化社会から生まれた。そのため、日本でよく聞かれる「自国」と「外国」の対立概念、例えば「アルゼンチン人」と「外人」といった区別は強調されない。アルゼンチンでは身近なところに違う言語を話す人や国籍が異なる人がいるのはごく普通のことなので、そのことで特別な扱いを受けることは少ない。アルゼンチンは異文化の人間に比較的寛容なので現在でも移住者がすぐに地域社会に溶け込むことができる傾向にある。またアルゼンチン人には自文化にあまり固執しない人が多いので、外国に行ってもその国の生活様式にそれほど無理なく適応できる傾向がある。

歴史も文化に大きな影響を与えている。スペインの植民地であり、そこから「独立した」ことはアルゼンチンの文化に大きな影響を与えている。「独立を勝ち取った」という記憶は、歴史の授業で教わるだけに留まらず、主要な通りや広場の名前、歌など様々な形で日常の中で語り伝えられて、人々の意識に根付いている。アルゼンチンには大抵この都市にも「5月25日通り」、「サン・マルティン広場」、「解放者大通り」などがあり、独立を思い起こさせる名称が冠せられている。この記憶は「自由」や「自治」に対する憧れの源ともなり、音楽や文学、芸術など様々な分野で独自性を追及し自由な表現を求める傾向につながる。しかし、スペインから行政的に独立したからといって、既に人々の間に根付いている言語や生活体系を全て独自のものに変えることはもちろんできない。また、ヨーロッパ文化の影響から離れることもできない。従って、スペイン文化やヨーロッパ文化の基盤と影響を残したまま独自性を追求するという、ある意味矛盾的とも言えるような現象がおこる。このような形の自由や独自性に対する希求は、日本のように植民地化された歴史がなく、かなり明らかな独自性を有する文化がある人々からすると奇妙な感じを与えるかもしれないが、こうした傾向がまさにアルゼンチン的であるともいえる。

現代史はアルゼンチン文化に直接的な影響を与えている。20世紀のアルゼンチン社会が経験した長い激動の時代はアルゼンチンの文化に様々な足跡を残した。中でも政治の表舞台に二回登場したペロン大統領やその妻「エビータ」、イギリスとの紛争、軍事政権時代の犠牲者等は映画や演劇、小説、音楽など様々な分野でテーマとしてとりあげられ、現在でも多くの人々の間に生々しい記憶として広く受け継がれている。

歴史の中でブエノスアイレスと地方の対立する文化に関して少し説明したが、現在でも都市文化(cultura ciudadana)と地方文化(cultura del interior)と呼ばれる文化的な違いがあるとされている。

全人口の3割以上が集中するブエノスアイレス首都圏の都市文化は、対外的な意味でも重要な役割を果たすアルゼンチンを代表する文化といっても過言ではない。ブエノスアイレス出身者は、スペイン語で「港の人」を意味する「ポルテーニョ」と呼ばれているが、首都圏は地方よりイタリア人の移民が多かったのでイタリア文化の影響を強く受けている。それは例えば、大家族を重視する家族関係、パスタやピザなどをよく食べる食生活、イタリアやフランス風のファッションを好むなどといった傾向に見られるが、中でも最も特徴的なのはポルテーニョの話し方がイタリア語的になっていることである。

ポルテーニョはイタリア語と似たイントネーションで話すだけでなく、イタリア語に由来する語彙を多く取り入れた「ルンファルド」と言われるスラングを使う。例えば、イタリア語の「lavoro」(仕事)、「gamba」(足)、「attenti」(注意)はルンファルドで「laburo」、「gamba」、「atenti」と言い、意味はイタリア語と同じで

ある。このルンファルドは、アルゼンチン文学、タンゴ、その他の音楽、演劇、映画などでよく使われる。これは例えば、東京で大阪弁を話しているとすぐにわかるように、他のスペイン語圏の人たちもポルターニョが話しているのを聞くと一瞬で「アルゼンチン人だ！」と分かるほど特徴的なものである。

ブエノスアイレスのコスモポリタンな文化を代表する人物の一人として作家、ホルヘ・ルイス・ボルヘスをあげることができる。ボルヘスはクリオージョ、イギリス人、ポルトガル人の血を引いており、スペインの土着文化を基盤としながらも、ヨーロッパの多様な文化に親しんだ知識人であった。彼はジャンルにこだわることなく、詩、散文、文芸批評など様々な分野を横断しながら活躍したが、テーマもブエノスアイレスの下町に関するものから世界各地の民間伝承に関するものまで非常のバラエティ豊かで、アルゼンチン的でありながらもコスモポリタンな態度で書かれた作品を残した。

音楽の分野では都市文化はアルゼンチンタンゴに代表されている。ユネスコの無形文化遺産としても登録されているアルゼンチンタンゴは、もともとは 20 世紀の初めごろ、ブエノスアイレスの下町の貧しい人々の間で誕生した踊り、音楽、歌が一体となったものである。タンゴの偉大な作詞家及び作曲家のエンリケ・サントス・ディセポロ(Enrique Santos Discépolo, 1901～1951 年)はタンゴを「タンゴとは踊る悲しみの表現である」と定義した。それはタンゴの男女間の情熱的な踊りの裏に、祖国を離れた下町の移住労働者の郷愁や孤独、悲しみ、苦しい愛などが表現されているからである。

一方、地方の間人はポルターニョのように自分達をコスモポリタンであるとは考えないが、国の文化的な遺産を存続させているという意味でのプライドは高い傾向にある。地方文化を代表する存在としては「 gaucho」をあげることができる。gauchoとは北米のカウボーイのように、主に牧畜に従事しながら自然の厳しさに立ち向かい、先住民(インディオ)とも敵対した人々である。gauchoは主にスペイン人と先住民の混血で、双方の言葉と文化と生活の知恵を受け継いだ。広大なパンパで生き残るのに必要な知恵、特に馬や家畜、野生動物に関する広い知識を持ち、質素な生活をし勇気を持つことで知られている。アルゼンチンには「gaucho文学」と呼ばれる分野があるが、それはgauchoの姿やその生き方の描写を通じてgauchoの知恵と価値観を描き出し、地方文化の豊かさを伝えるものである。gaucho文学の最高傑作として、ホセ・エルナンデス(José Hernández, 1834～1886 年)の著作「マルティン・フィエロ」(Martín Fierro)が知られているが、アルゼンチンではこれは日本の源氏物語のように学校教育で教えられ、地方の間人だけでなく全国民が知っている作品である。有名な文句は日常会話の中でも引用されるなど、マルティン・フィエロは地方文化の枠を超え、今日のアルゼンチン人全体の文化的アイデンティティの一部をなす象徴的な作品となっている。

地方文化の一番の特徴はその多様性にある。それぞれの地域で特徴的は話し方、音楽、食べ物、ポルターニョ、その他様々な伝統があり、それはそれぞれの地方独特の土着文化に根ざしたものである。

アルゼンチンの地方文化の多様性は、各地方のお祭りなどの催し物、音楽や踊り、衣装、料理などに顕著に見ることができる。¹⁹ 例えば、フォルクローレの音楽では、リズム一つをとっても、ゆっくりしたテンポの「サンバ」(zamba)、速く軽快なステップの「チャカレーラ」(chacarera)、明るい歌を歌うための「クエカ」(cueca)、踊らずに詩を唱えるための「バグアラ」(baguala)、高山のこだまを真似する「ビダラ」(vidala)、楽しいダンスである「チャマメー」(chamamé)、ゆったりした「ミロンガ」(milonga)、単純なリズムの「シエリト」(cielito)、南部の先住民が歌った悲歌のためのリズムの「ロンコメオ」(loncomeo)等、多様性

に富んでいる。

アルゼンチンの代表的な料理の一つである「エンパナーダ」は餃子のような形をした軽食であるが²⁰、エンパナーダは各地方によって、生地の手作り方や大きさ、中に入れる具等が異なるので国内の多様性や独自性を示す料理の一つでもある。

今日日本でも知られるようになった「マテ茶」は、東北部の先住民から伝わった代表的な地方文化の一つで現在では全国に広まっているが、その飲み方や器などは地方によって異なり、そこにも地方文化の多様性がみられる。例えば、何をマテ茶の器とするか、何をマテ茶に入れるか(砂糖、ハーブ、その他)、お湯で飲むか冷たくして飲むか等、地方によって様々なスタイルがある。

この他にも地方の様々な風土の影響を受けた特有の習慣や伝説などがあり、地方によってはかなり強い方言もある。

歴史が短く、人口の平均年齢が低いアルゼンチンは「若い国」であるといえる。アルゼンチンの文化は、若い人々のように、過去をあまり意識せず、将来よりも現在を生きることに関心があると思われる。不安定で変わりやすい傾向にあり、常に新しいものを求めているとも言える。変化を求める傾向は過去 20 年間の政治的、経済的に不安定な状態を生んだ原因の一つであるともいえるが、文化の分野では創造性や即興の力、新鮮さと未来に向かうダイナミズムにもつながる。例えば、音楽の分野では日本でも有名になったピアソラ(Astor Piazzolla, 1921～ 1992 年)はその一例といえる。タンゴにクラシック、ジャズの要素を融合させた独自の演奏形態を産み出した作曲家であり、バンドネオン奏者でもあったピアソラは伝統的なタンゴに新しいリズムを組み込み、ジャズやロックで用いられる楽器を使って演奏しタンゴの新たな分野を開拓した。一方、「新しいフォルクローレ」と呼ばれるフォルクローレの作曲家らは伝統的なリズムに異なるリズムなどを取り入れ、電子楽器等を使用して演奏するなど、絶えず新しいスタイルの創造を試みている。

アルゼンチン文化は、伝統を守りながら新しいものを受け入れていこうとする傾向にある日本文化とは異なり、異文化の影響を容易に受け入れ、伝統から抜け出そうとしながら新しさを求めるという傾向があると思われる。

最後に

ある特定の国の文化はその社会の構成員のあらゆる活動に影響を与えるが、定義できるものではない。しかし、その国の一定の様々な側面を描くことによって、ある程度の全体像をつかむことは可能であると思われる。この講義ではアルゼンチンの例を取り上げ、その風土や歴史、社会構成の主な特徴を紹介し、アルゼンチンの文化の全体像を概観することを試みた。本講義でどこまでその目的が達せられたかは判断できないが、受講した人々が既に知っているアルゼンチンの文化に関する知識のバックグラウンドにあるものを紹介することを通じて、アルゼンチンという異文化に関する新たな理解が得られたことを望んでいる。

参考資料

- 『アルゼンチン』ARCレポート、ARC国別情報研究会、2010/11。
中川文雄他『ラテンアメリカ現代史—アンデス・ラプラタ地域』山川出版社、1991。
加藤隆浩（編）『ラテンアメリカの民衆文化』行路社、2009。
国本伊代『概説ラテンアメリカ史』新評論、1994。
国本伊代・中川文雄（編）『ラテンアメリカ研究への招待』新評論、1997。
松本アルベルト『アルゼンチンを知る54章』明石書店、2005。
野谷文昭『ラテンにキスせよ』自由国民社、1994。
高橋均・網野徹哉『ラテンアメリカ文明の興死』中央公論社、1997。
Devoto, Fernando, *Historia de la inmigración en la Argentina*, Buenos Aires: Sudamericana, 2003。
Furlong, Guillermo, *Historia Social y Cultural del Río de la Plata 1536-1810*, Tipográfica Editora Argentina, 1969。
Luna, Felix, *Breve historia de los argentinos*, Planeta Bolsillo, 1997。
Romero, José L., *Breve historia de la Argentina*, Tierra Firme, 2000。

¹本講義は、平成24年2月25日に神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）と国際言語文化アカデミアで、アルゼンチン共和国と日本との文化交流推進に寄与する目的で行われたイベント、「アルゼンチンデー」の中で「アルゼンチンの知られざる文化」の題で行われた公開講座の内容の一部加筆・修正を加えたものである。

²在日アルゼンチン人は2,970人、神奈川県在住アルゼンチン人は817人（2011年現在、法務省登録外国人統計）。

³アルゼンチン国国防省軍事地理研究所。『アルゼンチン』ARCレポート、ARC国別情報研究会2010/11。http://www.ign.gob.ar/AreaProfesional/Geografia/DatosArgentina 2012.11.12

⁴アルゼンチン共和国観光局。

⁵Historia Marítima Argentina: El mar y los ríos argentinos, 1982, Departamento de Estudios Históricos Navales 参照。

⁶例えば1981年にユネスコの世界遺産に登録された著名なロス・グラシアレス（スペイン語: Los Glaciares、氷河）公園など。

⁷Romero J.L, 2000, 13-18 参照。

⁸国本、1997, pp. 278-279 参照。

⁹国本、1994, pp. 185-189 参照。

¹⁰高橋、1997, pp. 338-345 参照。

¹¹Luna F., 1997, 133-134 参照。

¹²Devoto, 2003, cap. 4-5 参照。

¹³中川、1991, p. 295。

¹⁴U.S. Department of State, http://www.state.gov/r/pa/ei/bgn/26516.htm#history 2012.11.12

¹⁵INDEC、2010年現在40,117,096（2001年の10%増加）

¹⁶日本は343.4人/km²、総務省統計平成22年現在。

¹⁷総人口の約4.5%、INDEC、2010年現在。日本は1.8%、総務省統計平成22年現在。

¹⁸国連が発表している平均年齢：人口を年齢順に並べ、その中央で全人口を2等分する境界点にある年齢。INDEC、2010年現在。国立社会保障・人口問題研究所
http://www.ipss.go.jp/pp-newest/j/newest02/3/t_4.html 2012.11.21

¹⁹松本、2005, pp. 151-337 参照。

²⁰スペイン語で“Empanada”とは「パンに包まれた」ことを意味し、肉、野菜、魚介類、チーズなどの様々な具を小麦粉ベースの生地で包み込み、油で揚げたり、オーブンで焼いたりしたもの。具材は様々だが、肉のエンパナーダが代表的である。